

# 知って当たり前 介護ガイド帳



上原喜光

大雪の中、今年の大学入試センター試験が行われた。

1日目の国語の試験で、第1問に大阪大総長の鷲田清一氏の「く身ぶりの消失」による」という文章があった。

私は、毎年、頭の体操に設問に挑戦してみるのだが、文章に「グループホーム」とか「デイ・サービス」などの用語が出てきたのに驚いた。

10代の受験生は、介護なんてほとんど考えられない年代である。親も現役で、祖父母もまだ元気なはず。一部の学生以外は、介護なんて異次元の世界の話のはずだ。

その10代に介護用語を使った文章を選んだこと自体、問題作成者に感謝したくなる。

彼らが介護者になる20年先、30年先は、年代や年収の違いで介護を考えるのではなく、国民全員が何らかの形で介護に参加していかななくてはならなくなる。そうでないと、この国は介護が成り立たない状況になっている。

設問では、グループホームや

## センター試験に「介護」が登場した意味



デイ・サービスといった介護用語には「注」が付けられ、説明が加えられていた。それでも、いずれ我々と介護用語を使った話ができれば、こんなうれしいことはない。

彼らが大学を卒業する4年後、団塊の世代である私や鷲田氏が、65歳以上の高齢者になることだけは決まっている。いや応なしに彼らにも負担をかけることになる。

試験で啓蒙するぐらいだから、20年先どころか、彼らの介護は、もう始まっているのかもしれない。

(全国介護者支援協議会会長)